

令和6年度第1回 南丹市地域創生会議 議事録

■日 時：令和6年6月19日（水）午前9時30分～12時00分

■場 所：南丹市役所本庁2号庁舎3階301会議室

■出席者

委 員：井爪委員、今西委員、大槻委員、窪田委員、黒田委員、谷口委員、廣戸委員、
俣野委員

（欠席：片山委員、高御堂委員）

事務局：市長公室 國府公室長

市長公室企画財政課 高屋課長、片山課長補佐、佐々江主事

■傍 聴：0名

1. 開会（事務局）

■委員交代について報告

【行政分野枠】旧：中越委員 → 新：井爪委員

【その他分野枠】旧：谷委員 → 新：片山委員

■欠席委員の報告および会議成立確認（設置条例による）

座長(あいさつ)：

地方創生の会議ということで第二期もよいよ最終盤である。地方創生、南丹では京都府と同じように、地域創生と言っているが、まだまだ続いていくものと思っている。日本全国どこに住んでいても、夢を持って安全安心に暮らしていけるような地域を作るということで進んでいる。実際問題、都市機能の再配置とか連携都市とかができていて、新しい日本の形が10年で見えてきたかという、まだまだ見えないような感じもしなくはないが、何をやっていくのかというようなことについては方向性は見えてきているように思う。さらに最近はデジタル田園都市国家構想ということも出てきて、社会のデジタル化と地方創生の両方をやっていくというようなことになってきている。引き続き皆様の力を借りながら、南丹市の地域創生を進めていくような取組を出来たらと思っている。また、地域創生自体は、毎回言っているが、行政だけでできることではない。皆様それぞれこの地域を代表されるような、各界の方であるため、ぜひこの地域の10年後20年後を思い描いて、それぞれできることをそれぞれやればと思っている。私自身は、昨年度も総合的な交流の時間というようなことをさせていただいたり、南丹広域振興局と協力してインスタグラムで丹波地域を発信するというような取り組みを学生と一緒にさせてもらっているところだが、この地域の地域特性を住民自身が理解して、それを外部に発信したり、サービスを開発して、それによって、人に来てもらったり、物を買ってもらったりしていくということが第一歩で、今後もこの地域が発展していく礎になればと思う。先般、西村市長とご一緒する席があ

り、その頃最新バージョンの消滅可能性都市の情報が出ていて、実は南丹地域は前回 10 年前と違って、消滅可能性都市ではなくなっているが、それは主に学校があって学校に通ってる学生がいるから、若い女性がいっぱいいるからそのカウントから外れるというだけであって、まだまだ取り組みが必要だという話をしたところである。そういうことで、今回の会議では昨年度の南丹市における交付金事業の振り返りをして、今後に向けての道を探るということになってくると思うが、引き続き皆様の力を借りて進めていきたい。

それでは議事に入る前に、まず今年度の地域創生会議の進め方について事務局から説明をお願いしたい。

■今年度の地域創生会議の進め方について事務局から説明

- ・事前送付資料の差替え及び追加資料について
 - ・今年度のスケジュールについて
 - ・前年度事業の評価は第1回会議と第2回会議で完結
- 【第1回】交付金対象事業の概要説明、次回直接担当部署にヒアリング事業の選定、評価確定に向けた評価シートの作成についてのお願い
- 【第2回】担当部署ヒアリング、交付金対象事業評価確定
- ・令和6年度は新しい戦略の策定する関係で第3回会議から第5回会議を実施予定であるため、現在の委員に再任いただきたい

座長：

承知した。ぜひ引き続き皆さんでやっていければと思う。いろいろご都合等もあろうかと思うが、認めていただけたらありがたい。

今回の議事については、第三期の南丹市地域創生戦略の策定についての説明をいただくということと、昨年度に行われた事業についてご説明をいただくということ、それから次回直接お話を伺う対象事業を決めていく。全国でこういう形で交付金事業の評価を実施されているが、直接ヒアリングさせていただくという機会を設けてるところはほとんどない。決して呼び出して怒ろうという趣旨ではなくて、このシートを見たり、KPIの達成状況だけでは、分かりにくい部分についてお話を伺って対象を選ぶということである。会話してお話を伺うということであるため呼び出すみたいな趣旨ではないということを再度確認しておきたい。現実的に、そんなにたくさんの方に来てもらうわけにいかないため、どこか 2 つぐらいパターンを決めて行うというように例年行ってきたため、今年も同じ感じかと思う。この評価というのは基本的にKPIが達成されたかどうかということで、あらかじめキーパフォーマンスインジケータというもので達成状況を見るが、それだけでは見えてこない部分があるため、委員の皆様にお集まりいただき、お仕事や生活をされながら持っていた情報も提供いただいて、各事業が狙い通りの結果を出してるかということを考えていくことになる。ただ時間も限られてるため一部事業について、特に担当者の方のお話を伺ったりしながら、さらに深めて評価をしていくという趣旨である。交付金の名前が、デジタル田園都市国家構想交付金事業(地方創生推進タイプ)というもの変わったが、中身的には一緒ということになる。

まず第3期の南丹市地域創生戦略の策定ということで、次の 5 年を見据えた戦略ということだが、事務局から説明をお願いしたい。

2. 議事

■第3期の南丹市地域創生戦略の策定について事務局から説明

- ・第2期戦略計画期間終了と国の総合戦略策定を踏まえ第3期南丹市地域創生戦略を策定したい
- ・これまでの基本目標を継承しつつデジタルの力を活用することを取り入れる
- ・第3期戦略の計画期間は令和7年度から令和11年度の5年間とする

A 委員:

全国で多くの自治体が今年、次の戦略を立てていくということになる。デジタル化ということで、特色を出そうという自治体もあるかもしれない。自動運転とか。私もドローンのイベントを一生懸命にやっており、ドローンで荷物運んだりしている。もう少しサイバー空間を思い浮かべるかと思うが、普通にドローンが飛んでいるだけで「デジタル社会」というような特色づけをしていくという場合もあるだろう。それ以外にもデジタルでいろんな行政手続きとかも含めて、都会でできるようなことをこのまちでもできるようにしたい。そうしないととなかなか人も来てくれないし住んでもらえないというところがあるため、標準的な線がどの辺にあるのかということを見据えて、整えていく必要がある。決して「デジタルも通じない田舎だから行かない」などと言われたいようにしたいということである。もちろんデジタルも通じないようなもつとすごい田舎だからこそ行きたいという路線もあるが、それは私が理解している南丹市がそういうことではないという理解である。一応ついていけているみたいなことに個人的にはしたいと思っている。そうしたデジタル社会をイメージしつつ、必要な技術を実装していくということと、今までやってきたような地方創生の両方を行うという話になっている。それらのビジョンやイメージを描きながら、その達成度合いを測るKGIとKPIを設定していかれるということである。

いつもは「KPIでは達成度を測れない」などと文句を言っているが、振り返れば我々が策定に関わっていたため、次期戦略を策定したら今後5年間もまた続けることになるかもしれないが、なかなかいろんな制約のある中で設定するものだが、そういう含みを持って今年度は取り組んでいくということである。

皆様から、この件に関して、ご質問や、ご意見とかがあれば頂戴したい。

B 委員:

「田舎の中の田舎」みたいなところも、一部で目指しておられる集落もあるかもしれないが、全体としては、便利などところがありつつの田舎というもので魅力を出していくところなのかと思う。

資料の中でも、市内就業率を見ると半分ぐらいは市外から通われているようだが、就業率で7割ぐらいを目指してるところの半分であるためもつと目指したいところだとは思う。どういう暮らしがここならできるというところをブランディングやPRをしていけると思う。より目的に合った人が集まって、より満足度が高まると思う。

C 委員:

自分たちの生活が満たされるというサービスをデジタルに変えていく際に、人じゃないと駄目な部分があるが実際にはあると思うが、そうじゃない部分はどんどんデジタル化して行って、皆さんに働きかけをしていくのだろうと思う。私たちはそういうただテレビ番組を作るとか、インターネットサービスを実施するだけではなくて、デジタルを活用して、皆さんの暮らしがどう良くなるかということを考えていく段階にすでに入っている。しかし、事業者が単体でできるものでもないし、行政単体でできるものでもないため、そう

いうチームみたいなのがあればいいと思う。そこで何が課題になっているかということを出し合い、どういうデジタル技術を使ったら解消するかを話し合うことが大事だと思う。どうしても点と点で話をすると重複したり、もったいないことになってしまうため、そういうプロジェクトチームみたいなものがあれば、前進するのではないかと常々思っている。一般の生活者としての意見と、行政の意見と、事業者の意見を言い合える場所があればと思う。

A 委員:

銀行の関係で、民間の事業者とか今後 10 年を見据えた動きとかデジタル化への動きとか、何かもしご示唆いただけることがあれば、お願いしたい。

D 委員:

やはり人口が減っているということは地域経済の衰退の可能性があると思ってる。まずは人が集まるまちづくりが必要だと思っていて、こういうところに住んでいても都会と同じようなサービスを受けられるようなデジタル化が非常に大きな武器になると思う。私どもの方でも Zoom 会議とかが普及してきており、何かあったら会議は Zoom ですするため、京都市内にいくこともほとんどなくなった。そういうものを活用して、この地域でもこういうサービスを受けられるというものをやっていただければ、人が分散してでも生活していくという感じになるのかなと思っている。やっぱりデジタル化はやっていくべきものなのかなと思う。

A 委員:

企業とか自営業者とかがここで商売し続けているとか、企業活動するにはどういうインフラが求められているのかとか、この地域で家建ててもいいと思われる人はどんなものを求めておられるのかとか、そういうご示唆いただけたら、この会全体としても、ありがたいと思う。

規模感が小さいこと言うと、Instagram発信というのを私のゼミで請負って、去年からやっている。「たんば発信局」というアカウントを作って発信しているが、去年は観光系の発信をしていたが、今年度は地方創生の発信をしようと思っており、地方創生上有益なものを何か見つけて、ステルスマーケティングしようみたいなことを言っていたが、「それはどんなものなのか」と学生に詰められた。太い道路があり、縦貫道から両側に伸びていってる道路があって便利で、綺麗な農地がある。こんな住宅街に住んでみたいとか発信しようかと思う。またネタを教えていただければ嬉しいと思う。

まだまだ伺っていきたいところもあるが、またどこかのタイミングで京都府の方針とか、周辺の動きの取り組み方も教えていただけたらと思う。

次の議題に進んでいきたいが、今度は令和 5 年度の評価事業ということで、これについて説明いただく。調査対象となってる事業ということで、基本的にはこの地方創生は民間の取り組みでもありうるし、むしろ民間でも頑張らなければいけないし、市役所の側でも、独自の予算とかで行っているものでも、当然地方創生の計画に入っているが、中でも、一定の条件を満たしながら、他地域の参考になりそうなものや先端的なもの、自分のところのお金だけでは実施し難いものなどについては、交付金を活用し、実行していく。その上でそれが狙い通りに機能したか、また地域の参考になるかといったことの評価を私たちの会で行うということになっているため、そうした評価の対象事業でなぜ私たちがするのかと言うと、それぞれの生活や仕事の中で各事業についての情報があると思う。それがこの行政の事業の担当者の考えだけで見るよりは、いろんな視角から見れていいのではないかという趣旨でこのようになっている。評価の対象になっている事業について事務局から説明いただく。

■「資料1:第2期南丹市地域創生戦略・関連事業に係るKGI・KPI推移」について事務局から説明

- ・資料の見方
- ・各項目ごとの傾向

■「資料2:令和5年度デジタル田園都市国家構想交付金(地方創生推進タイプ)交付金事業評価調書」について事務局から説明

- ・資料の見方
- ・各事業について端的に説明(各1分程度)

A 委員:

今から次のようなことについて、ご発言をお願いしたい。一つは全体的な、この地方創生の戦略の面について、最初にご説明のあったKGI・KPIについて意見もあろうかと思う。またこの交付金事業の内容でも大丈夫かと思う。最終的には、これらの中から、どの事業について、あるいはどの課に来ていただいて、どのようなことを次回の会議で伺いたいかということについて、この会議として決められたらと思うが、まず説明の多岐にわたる点について、気になれる点など言っていただければと思う。

南丹市の頑張りはもちろんあるが、民間の頑張りもあるかもしれないし、コロナ禍とかがあったり、円安がすごく進んでいる中で全国的なトレンドもあるかもしれないが、その辺も含めて、全般的に一部気になる数字もあるが、いい感じになっていると読み取れる感じにはなっている。この辺りについて、KGI・KPIの捉え方をどうするかということもこの会で議論するような内容になっている。

B 委員:

森の京都とか美山 DMO から上がってくる数字があるかと思うが、それはどこに入っているのか。

A 委員:

KGI・KPIに関わる数字を聞いていたら、ここに上がってくるだろうし、そうでなかったら、一般的な情報になると思う。具体的には、こういう部分の数字が上がっているはずだが、どこに行ったのかというような質問か。

B 委員:

KGI・KPIを決めるときに観光にまつわるところに「行政の代わりにお願いしたい」という感じでやっていると思うが、「この数字は数えて欲しい」と市から伝えている数字があるかと思う。違う数字で結構成果があったという報告は受けたが、KGIで数えることにはなっていないから資料には上がってはいないことはあると思う。

事務局:

特に森の京都や美山 DMO に関するKPIの設定を計画策定時にしているわけではないため、そうした数字はここには上がってきてない。

A 委員:

厳選した指標とその目標値の推移をとりあえずここで踏まえているが、それ以外のいろんな情報は各課でもらっているという場合など、いろいろ存在するという事だと思われる。この厳選した指標だけ

で成功とか失敗とか図るのは無理があるのではないかという説もないことはないということ。それをこの場で補うという趣旨である。

E 委員:

例えば、今の話で言うと、外国人宿泊者数がでている。そういうものは森の京都 DMO の活動を通じてとか、美山 DMO の活動を通じて出てきた数字というものもトータルで、南丹市として数字が上がっているという認識で良いか。いろんな団体の活動を含めて、南丹市の数字はこうであるという捉え方をすれば良い。

A 委員:

次に計画を作るとき、そもそもこの大目標の達成に関わるような指標と目標値になっているかや、KPIの方は主要な取り組みとして想定されてるものの成果が測れるようなものになっているかとか、例年これぐらいの時期に前年度の評価作業をしているが、この時期には数字が出ないということがあった。この時期に数字が出てくるようなもので評価していくしか仕方がないということがある。それで目標値について言うなら、理想的にこの地域のこの 2040 年とかそれぐらいのことを想定して、どれぐらいになっていないといけないのかというイメージを持って設定をしないとイケないが、実際問題はできることをできる範囲で国のお金をもらいながら、現状の延長線上の事業にならざるを得ないと思われる。頑張っって何とか挑戦して達成できそうな数字になってるかとか、手抜きの数値になっていないかという辺りをこういう場でチェックしていくという趣旨である。

ブランド京野菜の作付面積や農業産出額のKPIがあるが、農業産出額の目標が60億円ということなのだが、現実問題としては年々落ちてきていて、4年度と5年度はとても落ちていることが気になるのだが、その辺はどんな事情が現場であるか教えていただきたい。

F 委員:

KGIの認定農業者数+認定新規就農者数は数字が高くなっている。これは達成できていると思う。能力があって意欲を持って入ってくる若い子は結構いる。ただそれが、農業産出額に現れてないのは、一つは農協とかでブランド京野菜の取り扱いが減ってきていることがある。それと新規就農者の人らが、そういうブランド京野菜とかを作るのではなく、有機農業の産直とか、朝市に持っていかとか小さい八百屋さんとかに出荷していくというものが一つの流れになってきているからだと思う。ある程度若い農業者がいるが、数値に反映していかない一つの要因としてあると思う。ブランド野菜とか作って出荷を担っていた人は高齢化して、しっかり数値としては出ていないという難しい現状を、この数字が表しているという気はしている。

A 委員:

最近たまたま授業で、京都府の担い手育成実践農場の担当の方に来ていただいた。観光室長をされている方で、伴走型の支援をしているようである。話を聞くと、意欲のある方がこられているということとはよく理解できるが、その方たちが作りたいものが必ずしもブランド京野菜ではないとのこと。

F 委員:

その市場で流通する野菜ではなくなっている。丹後の方であれば万願寺とうがらしなどは市場の流通にどんどん入れている部分がある。丹波地域とかであれば、もっと市場が近いため、京都市内

に直接持っていきような、野菜の方に流れてるということが、数字になりにくい部分もあるという気はする。

A 委員:

担当課の気持ちもあるかもしれないが、それで上手に回っているのであれば、無理に目標にしなくてもいいという考え方もある。

F 委員:

ただ、新規就農者の経営は厳しいと思う。どういうふう支援していくべきかは難しい部分がある。

A 委員:

丹波のブランド産品をたくさん生産者へあげるというのはどうか。京丹波町の畠中町長と喋っていると、丹波栗がとても儲かるけれども数が足りないから生産者にあげていって、それが育ちつつあって、儲かっているという話を聞いた。ブランドイメージもあって、値段が高つくようなものの方が良いと思ったりする。その辺実際に農業されてる方とこういう計画の担当されてる課の方とかと、気持ちがうまく一致している方が良いと思う。意思がずれると5年間ずればなしになってしまうため大事な話かなと思った。

E 委員:

このブランド京野菜というのは種類が限られていて、京都府とかでも指定されている。認証とかされていると比較的わかりやすいと思う。京都府としてはブランド京野菜はブランド力が高まるようなイメージがあるため、普及することは大事だと思うが、南丹市の農業政策と一致しているかと言えば、どうかと思うところもある。

A 委員:

もともと15年ぐらい前は、京野菜と言わず「南丹野菜」を作ると言っていたが、いつの間にか京野菜になって、そして京野菜じゃないものを作ることに今トレンドが来たと思っている。別に皆さんが納得の農業をされていたらそれで私としてはいいと思う。とりあえずこの目標値と大分ずれが生まれたところ気になるところである。

E 委員:

転入者数と転出者数の取り方について、数値を見ていると転入超過だが、この住民基本台帳の年報は基本的な捉え方なのか。一般的な指標なのか。あと基本目標3の方で、「子ども女性比」とあるが、あまり聞きなれない。一般的には合計特殊出生率が使われるが、どういった考え方をしているのか、根拠を知りたい。全国的比較の視点でこの「子ども女性比」については違和感を感じた。

A 委員:

私はこれを決めたときの議論に確実にいたのだから、なぜこのようにしたのか。比較できるような全国的に一般的なものであれば、それで良いのではないかということだが、次に計画策定するときもそうしなければいけない。この取り組みを良いように見せかけるような指標をつけていても困るということだと思ふ。

F 委員：

農業や林業に関して、間伐材出材奨励事業について、これは目標達成していて上回ってるが、昨年はよくやられたという感じで、効果はあったというぐらいの話だが、山に倒れてる木を搬出する事業だと思うが、それにお金を出して、どこかに持っていきやすいようになっていく目的で行われていると思う。これをもう一つ工夫ができないものかと思う。南丹市には薪ストーブの補助事業がある。去年私も薪ストーブを入れたが、結構薪の需要はあると思う。それがそのまま大きいトラックでどこかに持っていかれることは、少しもったいないと思う。一件の家で使う薪の量は年間で15万円ぐらいかけることもある。これを何とか地域の中で循環できないのかと思う。日吉ダムの流木は、無料で貰えることがある。そういう取り組みのように、市場へ持っていくのではなく、地域の中で丸太を欲しい人に供給する取り組みが事業としてできたら、農村の暮らし方や山林地帯での暮らし方としてPRできるのではないかと思う。そうして地域の魅力や移住者の人に、こういう暮らし方ができる準備をしているというPRにもなるのではないかという気はしている。

A 委員：

あったら実際素敵だなと思うし、バーベキューをしたくても、どこで木を売っているか探したりする。無料で貰えることを目当てで来てもらおうと困るが、それは見せ方次第だと思う。林業大学校について、一定の要素を持った生徒もいて、林業に就職して新しいことやりたいと言っておられる。仰っていたようなものは可能性があるかと思う。

F 委員：

山から間伐で倒して出していくために、専門的な技術や資材が必要だが、ある程度切ってしまうと薪割りが生き方として面白い、薪ストーブを焚くのが面白いという人には、需要があると思う。そこまでの間を処理するような事業があれば、もう少し地域の中での木の循環みたいなことができると思う。ストーブを入れた関係で助かるというのが本音である。

A 委員：

製材業の人とかがするものなのか森林組合がするものなのか、どっちなのか。

F 委員：

森林組合でほぼできると思う。プロでないと出来ないと思う。自分も農業やっけていても、下手にチェーンソーを使うのは危ない気はする。

A 委員：

そうだと森林組合や林業大学校とかに声をかけて協力してもらおうという話になるだろう。

大きなところで、引き続き何かあれば言っていたきたい。その後、個々の事業に話を移したいと思う。

この地域は大学や学校のあるまちづくりをしている。女子学生がたくさん通学している横を通ってきたが、この女性たちがいるから南丹市は消滅可能性都市から脱却したのだと思いながら運転してきた。学生たちに地域活動に奉仕せよと言いたいわけではないが、南丹市に来ていただいている間にこの地域と何か絡んでいただいて、卒業された後も関わってもらえるようになってほしいと思う。そういうようなことが、全体的な戦略に入っているのかと言えば、正直そこまで入っていないと思う。今後何かそ

うした関係を深めていくとしたら、どのようなことがあるか、もしよかったらコメントをいただきたい。

G 委員:

学生は学校と自宅との往復というのが正直なところかと思う。なかなか南丹市と関わる機会が少ないと思う。例えば市内の空き地を何か活用できないかということで、建築大学の学生が提案をしていた。そういったところをきっかけに、南丹市にもっと学生が興味を持ってもらえたらと思う。

A 委員:

授業とかでも、教養とかみたいに全然関係ないカリキュラムで入れられると思うが、まちづくりとして地域と関わるような工夫をいただけたら嬉しい。お金をもらってゼミの一環で訪れたりして、小中高校の総合的な学習とか総合的な探究で、地域と関わるような話を盛り上げていこうとしているが、大学等にも何かあったら、学生にも学校にも地域にもそれぞれ嬉しいことであるといいと思う。

G 委員:

先ほど仰られていた間伐材の活用方法について、伝統工芸大学校も木工芸専攻がある。学生が実習でいろんなものを作っているが、そういったところでも活用があればと思う。

A 委員:

ベタだが何か学生に作っていただいて、「伝統工芸大の学生が作ってくれた」と言ってあちこち歩けば宣伝にもなり、「すごいな」となる。とりあえず win-win だろうと思ったりもする。お互いに声をかけないと、何も始まらないだろうと思ったため申し上げた。そのために市としてどんなことをしてくれたら、学校として関わっていけるのかみたいなことがあろうと思う。次の計画を立てるときは大きな節目であるため、また何か言っていたら嬉しい。

働き方とか人手不足とかそういう大きな問題にずっとなっていると思う。現状とか今後に向けて、大きなレベルの話とか一言いただきたい。

H 委員:

職場では、どこの産業、どんな分野においても人手不足は大きく深刻な課題になっている。デジタルを次の計画に入れていこうという話があったが、そういう時代が来ているため、そういうことを進めていかなければならないと思う。私はバス会社に勤めている者だが、バス運賃の支払い方法についても、キャッシュレス対応のみのバスが出てくるそうである。これは走るところを限定して運行しないといけないうと思うが、今まで現金しか使わない方、ICカードとかそういったものが使えない方がおられる。今回は事業の中でスマホの教室があったが、やはり高齢化が進んでいる南丹市であるし、一方ではデジタルも便利なものの、デジタル化に対応しにくい方々に対して使い方など、いかに教えていくかということにも力を入れていかなければならないと思う。現在、自動運転バスの実証実験が全国的に進められているが、それも一方では、緊急時になったときに人の力は必要になる。何もかもデジタル化を進めるということは、危険ではないのかという思いも持っている。ただ私も、コロナ禍以降、リモート会議をしている。ずっと3年半か4年ぐらいしていた。確かにZoomで会議をする場合、会議の開催場所の関係では、長距離移動の必要がないので便利である。参加率も高まることは、非常に利点であり、今も併用しているが、デメリットとして、パソコンの小さい画面で見ているため、対面であれば顔とか名前、誰が発言しているかとか分かるが、なかなか画面の中ではそこまで名前も顔も覚えられないなど、そ

ういったデメリットがあると思っているため、次期計画のことを言って申し訳ないが、デジタル化を進める上でも、そんなところもしっかりと見た上で進めていけたらと思っている。あと今回のヒアリングについては、新規事業のところを中心に議論していただけたらいいと思っている。デジタル化のところに来てもらうのもいいと思う。

A 委員:

福井県おおい町の方でお金を貰ってドローンのイベントを行っていて、今年も実施するが、「ドローン特区みたいなもの作ろう」と言っている。地方の方に行ったときに、一般的にドローンは人員の削減効果があるが、働き手が減っている中で、みんながしていた仕事のほんの少しが削減されても、人数が一人二人と消えていってしまっているのはどうしようもないため、今まで三人いたが二人になっても仕事が回るようにドローンがいるとか、そういうものでないと何円削減できるかというようなことでは地方は回らないと言われている。農作業が少し楽になって、今まで四人いたのが二人になったのに、少し楽になったって回らないという話をしていて、そのうち1台を代わりにやってくれるとか、南丹でもあると思うが、小さい橋梁の維持管理で、足場を組んで見て回ると大変だが、基本的にはドローンが見て、画像でAI判定をして、怪しいと思うところをピンポイントで先に行くというようにすれば明らかに作業時間も減り足場も組まなくて済むし、助かるという話をしているが、効率化とか削減が役立つのか見極めて行かなければならないと思う。この話を初めて聞かれる方はどんなすごいことをしているのかと思われるかもしれないが、小学生にドローンの体験をさせたり、有害鳥獣を模した的に体当たりさせたり、或いはドローンにバトンを吊るして鬼ごっこをしたりしてただけである。この間、教職員の方々の集まりに呼んでいただいたため、今のような取り組みをこの地域でもしたいと大々的に言ってきた。

C 委員:

先ほどのブランドの話だが、来年の万博でPRするものについて、京都府の中でもPRがしやすい市町もあれば、なかなかPRしにくい市町もあるというような話を聞くことがあり、「ブランド野菜の産地」というようにPRするのもいいと思うが、私の生まれたところは皆さんが農業をされている。最近若い人が入ってきて、新しい若い方が農業をされているということも何件か話を聞くが、過疎が進んで周りの高齢者が亡くなっていくため、若い人が農業をしに来てくださることは、地域としてはありがたい。そういう若い人が何に困っているのかと思う。売り上げもそうだが、やはり農機具が要るし、その環境的にすべて揃ってから来られるわけではないため、そういう若い人が長く続けていただくために補助が使われるといいと思う。例えば他所から来られて、空き家への入居を考え始めたりされている方がたくさんいらっしゃると思うが、空き家だけを買うのではなく、土地として田んぼがついてきたとして、そこを駐車場にしたくてもできないし、農業をしと言われてもなかなか農地をどう活かすか悩むという話も聞いて、難しい部分もあると思うが、そういう農地の転用とか、都会の人が入ってきやすいことが何か進められないのかと思った。

またAIとかデジタルの話があったが、京都市内であればバスが次にどこに来ることが出る。そういうことができないかという話を社内でも話している。GPSを積んでおいて、5分後ぐらいに家の前に来ると、携帯に通知が来て、お年寄りなどが暑いところで待たなくていいとか、その携帯をタッチすれば、小銭がなくても乗れるとかがあればいいと思う。その半面、どれだけの方がそれを使えるのかという問題がある。横で繋がっていかないと、この部分だけ良くなったから大丈夫というわけではない。来年度以降、そういう課題が出てくると思う。単体の事業一個一個では解決できないため、それぞれでしていることを横で繋がることの話があるのかどうなのか。観光の事業はすごく多いと思うが、一個一

個、細かい事業であるため、事業を繋げたらもう少し膨らむこともあるのかと思う。だからといって何番の事業と何番の事業を組めばいいのかというのは難しいが、横の繋がりがあの方がお金をもっと有意義に使えると思った。また新規事業のサブカルチャー人材育成について、「今後そういうことしたいから話を聞いた」という時点までの事業なのかなと思うが、これは具体化にどう展開をしていくのか気になる。

また、キャッシュレス基盤整備計画策定事業について、商品券だけと考えると、ピンポイントなものになってしまうが、商品券がどうやったらキャッシュレスに使えるかというと、例えばスマホで市民が使えるアプリみたいなものがあるって、それを使えばバスに乗れるとか、商品券は別のものを使うとか、バラバラの機能を入れてしまうと、いろんなものを持たないとできないみたいな話になるのかと思った。その辺が今後どう展開になるのか、私たち自身も事業者として何かお手伝いできることがあるかもしれないと思ったため、聞いてみたいと思う。

A 委員:

大きく三つ言っていた。一つ目をもう一度お願いしたい。

C 委員:

一つ目のブランドの話は、農業者自身を支援するのか、ブランドみたいなものを作っていくのかによって違う支援になる。本当はそういうブランド産地であると言うと、いろんなところにアピールもしやすいし、万博のときにもそういうものの産地であると発信すると、南丹市の名前が売れるみたいことはあると思う。似たような地域がたくさんある中で、特化して「南丹市はこれ」みたいなものは、なかなか難しいと思う。その辺をどうふうに支援して、どっちを重点に置くのか。

A 委員:

南丹市には柚子とか山椒とかいろいろあるが、少し弱いと感じる。朝倉山椒も調べてみて、いいものもあると思ったが、兵庫県豊岡町が本物の発祥というホームページがあった。南丹市のものは全部おいしいが、微妙に何か弱い。海の京都などいろいろあるわけで、竹が一番弱いとか冷たいことを言われているが、森が二番目に弱いとかで、外から来た人もすぐ宇治茶を作りたいとか。そんな気楽に宇治茶が作れるのかと思うが、宇治茶を作りたいという人はやっぱり多らしく、ここに来て京野菜を作りたいという人は少ないようで、この地区の売りみたいなものをより戦略的に考えていかなければならない。そのためには誰がどんな体制で考えるかみたいなことから、考える必要があるというご示唆があったように思った。二つ目に言っていた観光について、実に多様なものがあるが、その全体をプログラムとして捉えて、どういう組み合わせになっているのかということを考える必要があるということ。私も正直説明聞きながらこれだけ事業をやっている、映画の事業は2000万円以上も使っているが、お互いにどう繋がっているのかと思った。デジタル化をどのように進めていくか、国のデジタル田園都市国家構想総合戦略の中でも誰一人取り残さないということは当然言っている。すでに開いているような、こういう教室の事業でも、地域の若者を活かしていくというのは普通で、私たちは地域の関係者でもないのに、おおい町にドローンをしに行くついでに、町内会の人にスマホの使い方を教えたら、往復の交通費出してくれるとかで繋がっていたりする。上手くその地域の高校生や現地の大学とかを使ったらいろいろできるような気がする。この辺りももう少し複数の事業の組み合わせを考えて外の力をうまく引っ張り込んでくるという発想があったらいいのだろうと思う。ただ悪いことばかり言っているが、いつ見ても南丹市はこのリストが長いし多い。他の京都府内の団体は少なくて楽である。たくさん考えて交付

金を取ってこられることはいいことだが、上手くつなげるということが大事ということ。実際、こういう事業を申請するときには一つ一つのところで何か理屈づけをして、尖っていて、先導性がある、他地域に展開可能性があるみたいなこと言わないとお金をもらえない。それを上手に書いておられるのだが、書けば書くほど他との繋がりとかが言いにくかったり、一度出したものを変えようがないみたいなことになるというのがあるのだと、他所の自治体でも聞いている。ただこれだけたくさん交付金を取る力があるというのは素晴らしい。上手く活かして施策のレベルでつなぐとか、外の力も使って推進していくという発想があればいいとお話いただいた。

D 委員:

このKPIで気になることは、南丹市が住みやすいと感じる市民の割合。だんだん減ってきているなどという印象で、原因が何かあるのかと思う。あとキャッシュレス化については銀行としても推進をしているため、バスとかでキャッシュレス化が進んでいけばもう少し皆さんも使いやすくなるのかと思う。園部の方に聞くと、一日スマホがあれば、現金を使わずに生活ができるという方もいらつしやるため、もっともって増えていけば、もっと住みやすくなると思う。

A 委員:

これの基になってるアンケートの住みやすさについて五段階でつけていくということは分かるが、何か理由を書いたりする欄とか選択肢からその住みやすさが低下した理由が垣間見えるようなものが現行の調査にもあるのか。そしてまた今年度ご計画中のその調査とかそういうことを入れることは可能なのか事務局にお伺いしたい。

事務局:

住みやすいなら住みやすいと思った理由、住みにくいなら住みにくいと思った理由という内容を現行の調査でも行っている。

住みにくい理由については、やはり交通の便や買い物に住みにくいと考える理由として多い。特に最近は嵯峨野線の便数が、平日の昼間が1時間に一本になってしまったりとか、そういうことも影響しているというふうと思う。

A 委員:

実際デジタル化が進んだら、他所の地域であるものがないとか、JRでもICOCAで乗れるところと乗れないところでは全然違うと言うし、ここは乗れるだけありがたいが、JR西日本も相当厳しいとぼやいておられた。仕方がないのかなとも思う。

何を重視されてこの地域に住んでおられるのかとか、来ようとしてる方が重視していることをとらえることは大事である。多少関連すると思ったことは、子育てしやすい環境かどうかということは、正直主に子育てしてる人とするかもしれない人に聞かないと、もうすべて忘れかけてるような年代に聞いても仕方ないと思う。大変だけど育てられるのではないかとかというような意見を入れても仕方がない。実際にその点、子どもを産もうかなという人にとって育てたいとか、大丈夫だと思えるようなことじゃないといけないのではないと思う。ただそのサンプル集団で年齢とかで絞るととも少なくなってしまう。実質的に仕方がなくなるため、そのあたりは特化した調査とか、もうちょっとインタビューとかそんなもので、考えないといけないと思う。今行っている調査自体を変えてほしいという意味ではない。

B 委員:

子育て関係に特化したアンケートはあった。子育てしやすいか、という質問があった。

保育園に入れれば済むという働き方ではない人も南丹市は多いだろうと思う。9時～17時で預かってもらえばいいというわけではない気がする。

A 委員:

大概是住めば都的なところがあったり、本人が頑張ったり、家族が頑張ったりしてある程度解消するところがあるから難しい。全体としてどういうニーズがあるのかを捉えるのが難しい。

では次に、個別の事業とかについて聞いておきたいとか、特にこの事業について聞きたいとか、気になることがあれば、ご発言いただきたい。事務局の方で今すぐ答えられるようなことがあったら答えていただきたい。今答えられない場合は、次回また聞いて報告していただくということになるかと思う。事務局の説明では順調に実施ように聞こえた。

大学等連携推進事業の一環だと思うが、まちづくり交付金を出していただいて、総合的な交流の時間を実施しているが、担当の方と話をしていると、これ以外に、学生グループにまちに入ってもらって、非営利活動を行ってもらおう枠もあるがあまり応募がないため、是非先生のところでどうかという話をされた。そんな世間レベルで聞いたぐらいのことを学生に、自分に関わらないけれど自分の責任でしてほしいとは言えない。学生と市役所を上手くつなげるような仕組みがないと、これは進まないだろうと思う。大学との連携も相手を見定めて何をやって欲しいかということを手前に言えるところの方がそういう力は引き出せる。同じ課で一方で各集落に頑張ってもらいたいことをしつつ、大学の力をいっぱい鼓舞するという両面でやられているため大変だろうと思う。大学に来て直接説明するとか、学生も関わってくるような動画で、制度とかで何をしたいかとか聞くとか、何かしないと来ないと思う。学生は南丹ぐらいだと近いし来ようと思ったら来られるが、積極的に来る理由がないと行かないと言っており、やはり行く理由が大事である。

就職とかに興味のある人だったらある種のインターンみたいに短期的に就活の場で説明できるような成果があるようなものであれば実利として行きやすい。体験として語りやすいみたいなことは言われるだろうし、活動のイメージが湧きやすいものであればちょっと行ってみるかという感じだと思う。だんだん私も感覚が分からなくなってきたことは、例えばそういう活動をすると、地元テレビで活動のありさまが熱く取り上げられたらいい気がするが、学生は一切顔は出たくないみたいで、活動をして褒められたいが、デジタルで顔が残ることは絶対に嫌なようである。人目に触れず、地域貢献活動は難しい。

C 委員:

小学生とか中学生が地域に残るために地域を自分らが知ってないといけないと言って、地域学習にかなり力を入れてらっしゃって、どうしたら地域に残ってくれるのだろうかという議題がよく出るが、そのときに地域のいろんなところの活動に参加するとか、清掃活動をしたり、祭りなどに子どもを出させるのはどうだろうみたいな話があった。しかし、そういうものは能動的であるべきだと思う。行けと言われて行くことは良くないという話があった。中学生は今やタブレットで映像を作れたりするが、自分たちが地域のことを発信する役目を果たすとなると、調べないことには映像は作れないし、誰かに話を聞かないとできないため、地域の人と喋ると、自分も行ってみようかとなる方が良いと思う。行かせるとか来させるというよりは、自分たちで調べさせるということが、そういうことに繋がるかもしれないという話をしていた。子どもが作ったものを放送し、家の人や地域の人が見ると、「そんな祭りがあったのか」と地域の

人たちも行くというものに、どんどん若い人とか学生など、いろんな人に枠を使ってもらおうというふうにしフトチェンジしていく方がいいという話も出ている。もちろん自分たちが作るものもあるが、できれば大学とかが作った地域のネタとか、建築大学校とかも作られていると思うが、KCN なんたんの中で、提供枠として流させていただけると、見る人は違う目で見ていただけるし、視聴者も増えるし。両方にとっていいのではないかという話がある。もしご協力いただけるようであればタイアップとかも考えている。その中で実際にされている活動などの紹介もしていけたらと思った。

健康ポイントに参加している人は、3本映像を見るとポイントがもらえるため、私は全部見たが、どの栄養素がどう大事かということ、しっかりコンパクトに作られていて、YouTube でアップされていて、学生の勉強されてる方が作ってらっしゃるため、しっかり作っていただいていたのだと思う。そういったものがどんどん人目に触れていくように、広報でご協力いただけたらありがたい。

A 委員:

大学ごとに個性があって、京都府立大学の学生はそういうところに出たがらない。張り切って画面に出ると人はいるだろうと思う。需要があるかどうかかわからないが、「窪田好男の政策評価番組」とか、遠くの人を連れてきて政策現場探訪とか、何か考える余地がいろいろありそうで面白いし、企画を立てたりすることは学生たちも好きだと思う。

個別の事業についてどうか。今後の作業としては、各事業について、5段階で役に立ったかどうかの評価を各自でしていただいてコメントを書いていただく。それにあたって、わからないまま評価しにくいという声もあると思う。これはどうなっているのだろうかということを単純に聞いておいていただいてもやりやすいと思う。

F 委員:

首都圏でのJRのポスターについて、これは地方創生に相当効果があったとか、苦労したとか書いてあるが、私の息子は首都圏に住んでいて、そのポスターを見て、あれはということかと言われた。考えておられると言ったが、田舎の風景と南丹市と書いてあったが一体何が目的だろうと言われた。そこら辺はどのように評価されているかと思った。

A 委員:

この話は何回か話題になっている。首都圏の方に行ったら各方面で、来て欲しいからアピールして、最低限名前だけでも知って欲しいみたいなことで、特徴的な風景とその地方の何かを出すようなものになっている。提案してくるような会社とかもあるだろうから、効果測定したら一定説明があるのではないと思うが、この事業の効果はどんなふうに図れるのか。

事務局:

第2期戦略の振り返りのところにも書いてあるが、効果検証に苦労しており課題である。効果検証はどうかと問われ続けてきたが、実際なかなか難しい。そこが課題であるということは担当課も認識している。

A 委員:

500万円かかっている事業であるため、決して安いわけではない。普通に考えたら、京都のすぐそばで、日本の農村原風景みたいなものがあり、京都に来たら「そうだ、京都行こう」というものをJRが

宣伝してくれている。そのついでに南丹に行こうとなってくれたらいいだろうと宣伝していると思う。実際そういう効果は、あるかないかと言ったら私はあると思うが、もう少し宣伝のやりようがあるだろうという人もいるかもしれない。

何かにつられて新幹線に乗って京都駅に来て、京都駅にたくさんポスターが出たりしていて美山とか南丹とか書いてあったら、ふらっと嵯峨野線に乗ってしまうという意味なのだろう。ただ実際にはすぐ混んでいるために乗れないからやめておこうとなるかもしれない。丹波地区の発信でグルグル回っていると、日本の原風景と言われたら原風景だという気もするし、同じようなこと言っている自治体が安曇野市とか信州の大川村とかだが、あれはちょっと違うだろうと思う。後ろについている北アルプスの効果が絶大で、そのアルプスを抜いた信州に概ね近いようなこの地域こそが本物の日本の原風景だと言って宣伝はできるだろうと発破をかけて学生とインスタを発信し続けているため、嘘ではないと思う。

E 委員:

ポスターはどんなものなのか。

A 委員:

一般的にかやぶきの里とかで、ポスターやデジタルサイネージとか電車の中のパネルとかに、南丹市って出てきて印象的な風景の写真が出るものである。

京都駅の方は5年ほど電車乗っていないため知らないが、前見たときには柱のところにデジタルサイネージがついていて、順番に切り替わって、一斉に美山のかやぶきがたくさん出てインパクトがあった。そして南丹市と書いてある。それ以上は書いていないが、さすがにそこまで言われたら、電車に乗ればすぐ行けるが、少なくとも名前を知ってもらってポジティブイメージを持っていただいて、ちょっと行ってみたいと思うというようなもの。その先になんかベタな言葉で、「京都に来たついでに本物の田舎に行こう」とか、そういう余計なことは一切書いてないはず。シンプル路線である。最近、京都市のふるさと納税の返礼品とかがどぎつい京都弁みたいになっていて賛否両論あるが、そういう路線ではない感じのものを出しているようである。

C 委員:

海外の人とかは、その場で判断というよりは、情報を仕入れてからそこめがけていらっしゃる。タブレットとかスマホとかで調べられるため、この広告も流す場所によっては、東京とかでそういうかやぶきの写真が映ったらこれほどだろうという話になるが、京都駅で地元の人が見ても、南丹市かと思うだけになるかもしれない。出す場所によって、感じ方はもしかしたら違うかもしれない。嵯峨嵐山か亀岡で降りずに、その先に行かせるには、なかなか工夫が一つ二つでは難しいところもありそうである。

A 委員:

私は常々、真っ暗にして周りでたき火を焚いて、農民が踊り出したりというような、ベタに外国人が日本でイメージするような農村エンターテイメントがあれば人は来ると言い続けているが、学生に「そこまで言うなら先生が起業してすればいい」と言われてしまった。「それで採算が取れるとは私には思えない」とか言われたこともあるが、そういったエピソードでこういうものが見れるということを発信したらどうかという人が多い。

そういえばどの事業を出すかということになっていたと思うが、ここまで議論してきたことで言うと、観

光部署に来ていただいて、もちろん細々としたことは伺いたいが、次期戦略策定に向けた全体的な観光戦略やプログラムなどについてどうしているのかということの方が一ついいのではないかとと思う。あと同じようなデジタル化の戦略があるが、南丹市はどういう体制でやっておられるのか、いくつかの関係する課でやっておられるという話を順番に聞くだけでもいいのかもしれないが、次のデジタル化を意識した戦略を作るとなると、それも有り得るなと思った。もちろん農業とか子育ても話題にはなっているわけだが、どういう分野でヒアリングしたら良いと考えておられるか。

B 委員:

全体のブランディングが気になる。広報系のところの話を知りたい。商工観光なのか、地域振興なのか、秘書広報なのかかわからないが、そこで連携が取れているということであれば、そのようにお話していただけたらと思う。デジタルを使って特に観光に力を入れながら、呼び込もうとしているのかなと見受けられたため、デジタルか観光・広報系が良いと思う。

A 委員:

具体的にこの事業とかということまでの特定ができていないが、今皆さんからいただいたご意見をもとに、事務局の方とも調整して、次回ヒアリングをさせていただくことにしたい。

その他何か今日の議題について言い残されたことがなければ、事務局の方から次回までにやっていただく作業の説明をしていただいて、個別の事業を評価する際に、聞いてみたいということがあったら事務局の方に、各自で聞いていただいたらわかる範囲で回答いただけたらと思う。

京都府の方は次の5年間を目指して、この南丹地区とかではどういう方向にされているというようなことも聞いておいたらと思う。私個人はその南丹の地域振興計画とかもいろいろ見せていただいて勉強はしているが、京都府がどのようなことをされてるのかを教えていただきたい。

E 委員:

総合計画を昨年度改定して、それと地域プラン。スポーツ&ウェルネス&ニューライフを掲げて、この特色を出していこうというのが大きなテーマである。

A 委員:

私たちも一翼を担っているが、SNSとかで地域特性とか魅力を発信して、企業とか人がやってきて関係人口になったら、周遊滞在型観光をやってもらいたくて、そうすれば観光消費額が1200円とか1400円ぐらい上がって、その先に移住者が増えるという絵がある。地域計画の全体の四分の一ぐらいはそういうことになっていて、主に人を呼び込むということでは、そうしたことが書かれているということ。また京都府の方でも、次の戦略とかお考えだと思う。上手くそれがハーモニーになるような感じでいければと思う。

では多岐にわたることについて積極的にいろいろご発言を頂戴できて、また、皆様とさせていただいて良かったと思う。

3. その他

■事務局からの連絡事項

・インターバルにおける評価シート作成・提出の説明

・7月19日までにヒアリングシートの提出

■次回日程調整

・8月21日(水) 9時30分～

4. 閉会

座長:

次回の会議は、午前中ということで、本日も説明のあった事業の評価をしていただくことになる。お忙しいところで大変恐縮であるが、事業評価シートの作成もよろしく願いしたい。